

最初にかなで教えることは、いろいろとむずかしい問題を含んでいます。

たとえば小学校一年生では「木」という漢字を学習します。すると、最初に“かな”を教えられていますから、「きしゃがきました」を漢字で書かせると、「木しゃが木ました」になってしまうのです。

「き」といっても、子どもには「木」「汽」「来」「黄」などの区別ができません。子どもは習ったものは早く使いたがります。また、丸呑みで覚えてしまいますから、「き」というかなから漢字を判別することがむずかしいのです。子どもを漢字嫌いにさせる原因はこの辺にもあります。

最初から、「きしゃ」は「汽車」だと教えてしまったほうがいいのです。「きました」のときは「来ました」で、これが「来る」になるときは「く」と発音するんだよと教えてしまうのです。そして「つみき」のときは、「木」をそのまま使うんだよ、ヒマワリの色は「黄色」というふうに覚えさせてしまうと、子どもたちは案外わかるものなのです。自然と区別がつくのです。そうすると、他に「き」という字を書く場合でも、このときはどの字かな？ と頭を働かせるようになります。

「がっこう」でも、ひらがなで覚えさせるメリットは何もありません。この

世の中に「がっこう」という表記は存在しないのです。小学校の校門にあるのは「しょうがっこう」ではなく「小学校」なのです。わざわざひらがなで教えるのはムダです。

最初から「小学校」でいいのです。漢字だからむずかしいように思ってしまうでしょうが、自分の身の回りに、「小学校」という文字がたくさん存在しているのですから、自然と読めるようになります。こういうものを使って覚えていけば、子どもにでも漢字はすんなり入っていく、というのが私の漢字教育の基本なのです。

ポイント:教育はそもそも基礎がしっかりしていれば間違いないものです。私が幼稚園児で試してみると、年長組より年中組、年中組より年少組のほうが覚えが早かったのです。「三つ子の魂百までも」といいますが、三歳児から漢字教育を始めた場合が一番伸びたわけです。